

池田先生の言葉

病を、信心の向上の飛躍台にしていくのが、仏法者の生き方です。今こそ、わが人生は、広布にあり、広布のために生き抜くぞ、と決めて、信心で立ち上がるんです。

あなたが重い病で苦しむということは、使命もまた、それだけ深いということなんです。病苦が深ければ深いほど、それを克服すれば、仏法の偉大なる功力を証明するところができ、広宣流布の大きな力となるのではないですか。

あなたは、そのために、さまざまな宿業をつくり、病苦を背負って、地涌の菩薩として出現したんです。だから、病を乗り越えられないわけがありません！

(小説「新・人間革命」第10巻「桂冠」の章、303頁)

御文

この曼荼羅能く能く信ぜさせ給うべし。南無妙法蓮華経は師子吼のごとし、いかなる病さわりをなすべきや。

(經王殿御返事 新版1633頁1行目・全集1124頁7行目)

通解

この曼荼羅(御本尊)をよくよく信じなさい。南無妙法蓮華経は師子吼のようなものである。どのような病が、障りをなすことができようか。

御文

仏教をならわん者の、父母・師匠・国恩をわするべしや。この大恩をほうぜんには、必ず仏法をならいきわめ智者とならで叶うべきか。

(報恩抄 新版212頁3行目・全集293頁3行目)

通解

仏法を学ぶ人は、父母、師匠、国土や社会の恩を忘れてはならない。この大恩に報いるには、必ず仏法の奥底を学び行して、智者とならなければならない。

池田先生の言葉

現代人は、他人は皆、対立と生存競争の相手しか見えなくなってしまう、周囲の人びとの「恩徳」が、心の眼に映らなくなつてしまっている。そして、その結果、人間と人間が分断され、皆が互いに孤独を感じ、疎外感をもっています。

だが、心眼を、また、慧眼、法眼を開いて「恩徳」を見えさせていくならば、自分はいかに多くの人に支えられて生きているか再認識することができる。そうすれば疎外感ではなく、感謝の心が、喜びが湧きます。

仏法は、その恩に報いていくことを教え、そこに人間の道があり、仏法者の使命があると説いているんです。

(小説「新・人間革命」第17巻「本陣」の章91頁)

御文

ほけきょう たね 法華経は種のごとく、
植 手 仏はうえてのごとく、
しゅじょう た 衆生は田のごとくなり。

(曾谷殿御返事 新版1435頁13行目・全集1056頁14行目)

通解

(譬えて言えば)法華経は種であり、仏は植え手であり、衆生は田である。

池田先生の言葉

布教していくということは、自身を高める、人間としての最高の慈愛の修行であるとともに、人びとを幸福と平和へと導きゆく、最極の友情の証なんです。

大切なことは、「あの人がかわいそうだ。幸福になってほしい」という心で、周囲の人に、折に触れ、仏法を語り抜いていくことです。今は信心なくとも、こちらの強い一念と友情があれば、やがて必ず仏法に目覚める時が来ます。

(小説「新・人間革命」第2巻「民衆の旗」の章、271頁)

御文

法華経の法門をきくに付けてなお信心をはげむを、まことの道心者とは申すなり。天台云わく「從藍而青(藍よりして、しかも青し)云々。」

(上野殿後家尼御返事 新版1833頁1行目 全集1505頁8行目)

通解

法華経の法門を聞くたびに、ますます信心に励んでいく人を、真の求道の人というのである。天台大師は「青は藍から出て、藍よりも青い」と言われている。

池田先生の言葉

教学は、信仰の道標である。人間の感情は、移ろいやすい。燃え立つばかりの信仰への情熱も、時には冷め、心揺らぐこともある。その時に、自らの進むべき信仰の道を照らし出すのが教学である。また、仏法者の生き方の根幹をなす哲学を身につけることも、教学を学ぶことから始まる。

(小説「新・人間革命」第5巻「勝利」の章、244頁)